

季刊 連句 第38号

平成四年九月一日発行



季刊連句 第38号 目次

旅硯と旅畳み（南柏雑記 36）	1
作者付 杉内徒司	2
— 私の付方伝 —		
三吟歌仙 たかんな 古館曹人・草間時彦・東 明雅	4
第二回 猫蓑同人会	5
歌仙五巻	捌 秋元正江 杉江杉亭 式田和子 坂本孝子 大窪瑞枝	
俳人協会日独俳句交歓会 下鉢清子	10
— メモランダム —		
第四十二回 猫蓑会	14
歌仙七巻	捌 東 明雅 上月淳子 杉内徒司 高瀬美保 豊田好敏 仏淵健悟 若尾よしえ	
付句募集（付勝練習二十韻）	21
芦丈翁俳諧聞書（V）	22
「猫蓑作品集Ⅱ」を読んで 梅田利子	24
宗匠制度礼讃 大畑健治	26
二十韻 六巻	27
風薫る 秋元正江 他	
梅鉢の紋 倉本路子 他	
紅梅や 文音..... 中島啓世・東 明雅	
筍 文音..... 式田和子・峯田政志	
玉蟲の 捌 仏淵健悟	
梅雨曇り 捌 豊田好敏	
雁帛往来	29

旅硯と旅畳み

南柏雜記 36

雅

芭蕉は「おくのほそ道」の旅に出た時、矢立の外に、旅硯を持っていたのではなからうか。その時の持ち物として「紙衣一衣は夜の防ぎ、浴衣・雨具・墨・筆のたぐひ」とあるが、墨や筆はあっても、硯がないでは仕様がなではないか。旅の途中のいろいろなメモを取る時は矢立を使つたに違いないが、宿について、短冊や色紙を懇望された時は、おそらく荷物の中から旅硯を出して、書いたであろう。

私がつ持っている俳諧師用の旅硯はヨコー〇・六cm、タテ一九・四cm、厚さ一・一cmの樺の板をくり抜いて硯・朱硯・墨・朱墨・筆一本・朱筆一本の外に、九cmの物指を埋め、その物指の中に、小刀と錐とを仕込んだ精巧なもので、蝶つがいで同じ寸法の蓋がかぶさっている。作られたのは、幕末かあるいは明治になってからかも知れないが、とに角現代ではこんな細工物を作る人は居ないだろう。ただ、これよりも大ざっぱな作りのものは、その後、度々骨董店に現われ、時代も古いのがあるから、おそらく、芭蕉の時代にも、その原型と見るべきものがあつたに違いない。

矢立は墨壺に筆を入れる筒のついた携帯用筆記具で、私の持っているものは商人用らしく実用一点ばりのものであ

るけれども、これでも十分利用できる。私はこの矢立というものが日本人の発明した便利な筆記具として感心して来たのであるが、今年の五月トルコの Cappadocia に行った時、お土産店に矢立があつて、びっくりした。そして、イスタンブールの空港の土産物店でもまた同じものを発見したので、物好きの心抑えがたく、その一本を一〇〇、〇〇〇リラ（日本円二〇〇〇円）で買って帰った。このトルコ製矢立は、金メッキの鉄製らしくいろいろ装飾はされているが、いかにも作りが粗雑である。これを誰がどのようにして使うのか聞く暇もなく、飛行機に乗ったわけであるが、そうなれば矢立の元祖はおそらく中国あたりで、これが東に流れて日本に入り、シルクロードを西に辿つてトルコに流れついたのではあるまいか。今度、中国を旅行したら骨董屋で第一に探してみたいと思つている。

今まで矢立は旅にもつて行つて使つたが、旅硯は七月熱海で使つたのが最初である。これも便利なので、これから大いに利用したいと思つているが、そうなれば用紙も昔風に、旅畳み——半紙を豎二つに折り、更に四つ折にして真中に鉄を入れて作る——を使わねばなるまい。そうなれば、俳諧師としての実も自らそなわるといふものである。

（正誤）第三十七号の南柏雜記で、生涯七千巻の作者を贅川他石と書いたのは、松永蝸堂（一八三八—一九一九）の誤りでした。謹んで訂正致します。

作者付

— 私の付方傳 —

杉内 徒司

1

三井武翁に連句を習って八巻目の歌仙を巻いた折、左の
ような付をした。

投げやりし蜜柑独占猿のボス

子は二人とも芸術で喰ふ

武翁 徒子

(武翁 捌「茶亭の沙羅」昭和42・8・21)

「投げやりし蜜柑」から芥川童之介の短篇「蜜柑」の一
節―奉公先へ赴こうとしてゐる小娘が踏切まで見送りに来
た弟たちに車窓から蜜柑を投げて見送りの労に報いるシー
ンを思い出し、芥川の長男比呂志は俳優、三男也寸志は作
曲家―二人とも芸術家だと考えるに至って作句した。

武翁はこの考え方をほめてくれたが、後に思うとこれは
「作者付」の濫觴であった。

2

根津芦丈三回忌の追善集『芋日記』上梓を記念して、都
心連句会と信大連句会が初めて顔合せをした諏訪湖畔の久
保寺の俳席の作品に左の付がある。

哀れさよ清姫めきし惱乱に

「別れも愉し」ルナールの作

藤森雪溪

徒司

(野村牛耳捌「邯鄲無月」昭和45・9・13)

「邯鄲無月」は『夏の日』(角川書店刊)に掲載された
が、この『夏の日』に掲載されている牛耳・高橋玄一郎文
音「嶺々粧う」に次の付がある。

髪毛の毛たばねふかむ唇

読みふける「高野聖」は鏡花作

玄一郎 牛耳

(昭和46・9開吟)

私がこれをほめると、牛耳さんは「別れも愉し」の真似
ですよと微笑されたので私はびっくりした。

この前後に前句は思出せないが私は
「凱旋門」はレマルクの作
と付けた事もある。

3

英虞湾の真珠筏に月凍つる

「陸の人魚」は菊池寛作

東郁子

徒司

(山田和久捌「柿紅葉」平成元・11・5)

前句の真珠から菊池寛の小説「真珠夫人」を思い出し、
同じ作者の「陸の人魚」で付けたのだ。

私は昭和四年の夏休みに、その年の一月から配本になった菊池寛全集（平凡社版）を借りて、短篇、長篇小説を讀み耽ったのが長い歳月の後に連句の付けに蘇ってきたのに我乍ら奇妙に思った事を覚えてゐる。

翌年の松山市で開かれた第五回国民文化祭では次のように付けた。

病室の玻璃戸やさしき夏の月

西原李花

「肉弾」櫻井忠温の作

徒司

（徒司捌「秋うらら」（平成2・10・20）

日露戦役の勇士陸軍の櫻井忠温は愛媛県人。ついで乍ら日本海海戦に参加した水野広徳も同じ愛媛県人。

松山大会で初めて連句を大会種目に実現させた松山の鈴木春山洞が上京した折の歓迎会では次の付句を物した。

鯛のひそめる来島海峡

中島啓世

水野広徳「此一戦」の忘らるる

徒司

（春山洞捌「六義園落葉」（平成2・11・9）

4

菊池寛の効めは仲々のもので次の一連もある。

サングラスアロハシャツで父帰る

市野沢弘子

「第二の接吻」菊池寛作

徒司

ホロホロ鳥なかず嵯峨野ははだれ雪

同

（徒司捌「枯木立」平成3・12・1）

ホロホロ鳥は「愛染かつら」の主題歌西條八十作「旅の

夜風」をもじったもので面映い。

この時機「作者付」が定着してきたらしい。そこで最近の「作者付」二句連句の二例をしるしてみる。

思ひ出せぬ小説の題沈丁花

「風と月と」は三汀の作

この付には多少の説明がある。久米正雄の小説「沈丁花」が東京朝日の朝刊に連載されたのは、昭和八年六月から十一月の間。「ちんちょうげ」とルビがふってあったのを覚えてはいるが、その久米正雄の戦後に書かれたある小説の題が思い出せなかった。それは夏日漱石の門に芥川竜之介等と出入する頃からの久米正雄の自叙伝小説だが、最近その小説の題は「風と月と」とわかった。

久米正雄は中学時代河東碧梧桐を師と仰いだ俳人三汀と号し、句集『返り花』が昭和十八年刊行されている。

いざさらば九年馴染みし多摩訛

「あにいもうと」犀星の作

犀星のこの小説の舞台は梨畑の多い多摩川べりだからだ。

顧みると私の「作者付」はすべて古い大正時代の作者だが、要はこの伝で石原慎太郎、司馬遼太郎の「作者付」が考えられるのではなからうか。

第二回 猫蓑同人会

歌仙五卷

平成四年六月十日
於 俳句文学館

若葉風

秋元正江捌

日本民芸館特別展「信と美」

若葉風李朝の巫女は口結ぶ

夏の館に紛れ込む蝶

波乗りのひとの巧みに涛越えて

ロープに挟むタオル・カラフル

つながれし犬吠えたる白き月

子らを動員もろこしを焼く

北行けば稲架のつくりも武者がまへ

盛塩したる古き料亭

売れつ妓のチャームポイント泣きぼくろ

ナナハン飛ばす彼と一体

数へれば後二千日わが余命

織月牙ゆる後立山

ワルキューレ駆くるが如く雪しまく

破れし譜面をオークションで買ひ

「つれづれ」といふ弁当の旨かりき

「とまと」「あさひ」と名のる銀行

校長の着任挨拶花の影

蛙解剖逃げてつかまる

正江

遊

子

子

徒司

哲

元

哲

遊

哲

遊

郁

元

司

遊

司

哲

元

オホ山肌に種蒔爺さんみつけたり

ローカル駅の無人改札

エコロジーツアー空缶拾ひから

これが楽しみなからの酔

赤禪ベニぜんの頃からずっと忘れず

芦屋マダムの遠きまなざし

絵解き僧美形におはす道成寺

乾燥粉末おろし大根

きつつきの開けたる孔のぼっかりと

冬の仕度も郷に従ひ

倫敦の巷さまよひ月仰ぐ

オチ「夢十夜」書く鬱の漱石

塗壁といふ化物の出づる宿

つつかへ棒で半生を過ぎ

深呼吸してジョギングを再開す

干鰯焼く匂ひ流れて

花ぐもり墨師ひと部屋ひとり棲み

弥生尽きたる歌仙張行

郁

同

遊

哲

遊

元

司

執筆

郁

哲

遊

司

遊

郁

哲

郁

江

元

茅の輪

杉江杉亭捌

神妙に親子で潜る茅の輪かな

木々の梢を過ぐる青嵐

垣間見るテレビドラマの可笑しくて

猫すり寄りてせがむ夕食

下り月鱗のやうな雲間より

自転車こいでうそ寒の人

舞茸を籠いっぱいにつめこんで

分け与へたき顔のあれこれ

色白の「秋田小町」に「ひとめ惚れ」

単独赴任の日々はたのしき

ボルドーにワイン利き酒はしご酒

太道芸に喝采の沸き

年用意駈けつり廻る街に月

牡蛎船二隻岸に繋がれ

方言も商ひ方便使ひ分け

下駄つっかけて外湯探訪

花吹雪作務衣の僧にふりかかり

BGMは春蟬の歌

杉亭

明雅

良子

千雪

澄子

志げ子

雅

良

雅

良

同

雪

同

亭

志

同

同

雅

やまんばもつちのこも出てうららかに

おっとり刀村の若い衆

にぎりめしいぶりがつこをとりまはし

色とりどりのバック包装

花火はぜ掛声「玉や」河川敷

夢の島では蠅退治する

無味無臭天然水が飲みたいの

恋女房に頭上らず

ダイアナ妃不仲報道次々と

月に響けとシンセサイザー

桐一葉はらりと落ちし岩のかげ

婆精出して鯛干す浜

嬰籙の爺はまたも旅仕度

エアロビクスにテニス・ピンポン

六本木・渋谷・原宿・吉祥寺

朝の広場で鳩に麵麴

桜時快気祝ひの嬉しくて

中天目指し昇り行く風

雅

良

雅

良

志

雪

澄

雅

同

同

良

同

澄

良

亭

雪

雅

志

梅雨じめり

式田和子捌

ふくろふの睨重たし梅雨じめり

葺替へすませ涼し藁屋根

甜瓜ガラスの皿に切り分けて

おもちゃのピアノ叩く幼児

地平線大きな月の淡き赤

秋の渚に万祝で待つ

磨き盆耳なれし声気にかかる

肩までのびて髪の眩しき

誘はれてすぐOKの軽はづみ

牛歩戦術疲労困憊

マティニーをちびりとやってダート投げ

役者稼業のサイン習ひし

月明り思ひ出せぬか懐手

聖燭節の列の肅々

バルセロナオリンピックの近づきぬ

武蔵丸にも通訳をさせ

橋くぐる花見の船に揺れてをり

気球ゆらゆら霞みたる空

和子

淑子

弘子

千町

あかり

好敏

麻子

弘子

り

敏

町

り

淑

麻

町

敏

麻

淑

よろこびはひとつ春愁二つ来て

喪にありてこそ人を恋ふなれ

はぢらひて紅ひく熾愛しらし

紙鉄砲につきし尻餅

尺蠖の枝に似せたる天の智慧

小悪魔住むサルビアの奥

株もだめ金利も低いどうしよう

付箋をつけて戻す郵便

カンバスの男の顔をゆがませる

知らずに認知させられて月

風化せし奈良の石櫃こぼれ萩

山峡の道辿る漸寒

熱燭は五臓六腑にしみとほり

目玉のうまい鯛のかぶと煮

『ガテン』みてブランド好きの大工さん

君も脱サラ僕も脱サラ

かはたれに花の香りの艶めける

いろはにはほへと夢の朧に

町

弘

和

敏

弘

淑

り

淑

弘

敏

町

麻

弘

淑

敏

弘

和

町

時の日

坂本孝子捌

時の日の高架に鳩の憩ふかな

うす紫に棟咲く頃

朴菌下駄旬のいさきに串打ちて

ちよっと喋れる英語かたこと

望月に運動会の準備終へ

やや寒の町風呂屋賑ふ

おくんちの竜を踊らせる髭男

目をつむらせて触るる唇

色よりは食ひ気盛りと思ひしに

地球サミット誰が為の会

月冴ゆるピレネーの北ロマネスク

漱石忌なり持葉たづさへ

喜寿にして青春気分仮免許

フルート流る丸木小屋から

幾何模様裂織を子が習ひをり

記念切手を舐めて貼りける

転勤の荷物をほどく花の下

遠き蛙のいつか途絶えて

孝子

啓世

よしえ

淳子

清子

久美子

清美

同

え

世

淳

清

世

清

孝

美

世

淡雪の池に吸はれてすぐに消え

萩の茶碗でひそと昼酒

張り込のポケットベルに舌打ち

万札の束詰めて駆け落ち

縋る恋狸に秘事を覗かせて

辻の地藏に供ふ寒菊

バス停をお上りやして東どす

エスプレッソにプチケーキ添へ

鮮かにやくざも往なし支配人

余暇こつこつと綴る美術史

灯を消せば月光蒼くあふれけり

風炉の名残の水屋閉され

秋蘭あきらんを売りに峠を越え行きぬ

森林業の跡継ぎはなく

陶像の翁に当る大西日

石に坐りて煙草一服

幻の花のさかりを目裏に

麝香あげはの翅のたゆたひ

淳

同

清

美

清

え

淳

美

淳

え

淳

清

同

美

世

え

孝

世

繡線菊

大窪瑞枝捌

繡線菊の穂に咲く門や百人町

舗装路かすめ夏の燕

かき氷児等の口もと赤くして

ビデオ予約がちよっとお得意

待宵を誘はれて居る無尽講

土間に転がる落鯛の魚籠

ゆく秋の沖見遙かす竜馬像

胸の分厚い彼に惹かれる

時かけて紡ぎし想ひひと言に

酒は飲んでも眠るべからず

お顧客様招待ツアー商栄会

ホカロンこたつ暖炉湯たんば

雪吊の木の間に織き月懸り

「敦盛」吟ず琵琶を構へて

かにかくにいままだ残れる尾軀骨

牛の歩みでめぐる国会

気紛れな花びらが又ひとしきり

山が笑うた空も笑うた

瑞枝

美保

隆秀

雅代

利子

達子

利子

代保

秀保

秀保

達子

秀保

代保

保代

利子

代保

同保

レガッタのオールを揃へ息揃へ

バンド集まる駅の雑踏

差配師に負けは取らない日本語で

わたしよめさんみつけたいのよ

抱かれて後は骸となるばかり

原爆の忌を夢に忘れず

軒下の糸瓜ぶらりと風に揺れ

プリンスもどきちよび髭の月

利酒のロスチャイルドに上機嫌

だめ虎遂に首位の栄冠

島原は受難の歴史くりかへし

あっけらかんと語る深皺

釜揚げのうどんに添へる葱薬味

気の合ふ同志いつも囲む暮

名画祭デイトリックヒを特集す

永ければなほ惜しむたそがれ

恍惚と花の真中に立ち尽くし

もつれて離る黄蝶白蝶

利達

利秀

利秀

利子

代保

利達

保代

利秀

秀保

達子

代保

同保

秀保

利子

枝利

同保

達子

同保

俳人協会日独俳句交歓会

メモランダム

下鉢清子

五月二十一日から三十日までの十日間、俳人協会主催の「日独俳句交歓会」に参加するという旅に恵まれた。

訪独団の団長は「春燈」主催の成瀬桜桃子氏、世話役は俳人協会事務局長で「青山」主催でもあられる山崎ひさを氏に、「藍生」主宰の黒田杏子氏、男性十名女性十二名の超結社の人々総勢二十二名という顔ぶれであった。

ケルン・ベルリン・ミュンヘン・フランクフルトとドイツの東西南北に位置する主要な四都市を巡りつつ、ドイツ国内の俳句作家や愛好者との意見の交換に努め、その間寸暇も惜しまず名所旧跡も尋ね、多くの風物に接しようとのスケジュール、企画発表時から「今度の旅は並々ならず厳しいよ。」などと言われていたものである。この日まで日本国外には一日だって追放処分を憂き目に合ったことのない私であるから、俳句交歓の名が付いた十日間の長旅に、二の足を踏んでいたが、五月の満目草木真緑と百花繚乱の最も美しい時期のドイツを歩くことが出来たのは、生涯忘れられない旅の一つとなり関係の方々に感謝一杯である。

快晴の二十一日午後二時、成田を発つたルフトハンザー航空七一一便は、ブツサーズ（灰鷹の一種と言われる）のマークも鮮やかに、只管に入日を追って西へ西へと飛び続

ける。オビ川の巨大な蛇行、ウラルの雪溪を一万二千米の高みから眺めつつ、一睡二睡午睡なのか就寝なのか何時目覚めても昼の光の中を、狭い座席で十二時間の座禪を組み続けたのである。南無阿弥陀。

白夜の国の第一夜はフランクフルトのアラベラグラントホテル、時差七時間余の時計を現地時間に合わせた。

聖堂に白夜未明の月淡し

清子

榆の森白夜ふくらみ明けにけり

同

第一回の交歓会は二十三日（土）ケルンの日本文化会館で開かれた。白鳥や鴨の遊泳する湖を前にした鉄筋の美しい建物で、ポーチを巡る野薔薇は真つ盛り、空を楊柳の絮であろうか無数に浮遊していた。階段式に椅子の並ぶ会場の大ホール、館長の荒木忠男氏が応待に違が無い。土曜日なので事務員はお休み、ボランティアの方々が手際よく仕事を捌いておられた。午後三時より、ドイツ俳句協会会長ブアシャーバー女史の「ドイツ現代HAIKUの四分類」成瀬桜桃子氏の「日本俳句の季語・その他」関森勝夫氏の「芭蕉・蕪村・一茶」の講演に続く討論がこの会場のプログラム。日独俳句交歓会の第一日にブアシャーバー女史の講演を伺うことにより、ドイツに於ける俳句事情を掴み

得たことは、続く他都市の人々との交歓の折の良い尺度となり幸いなことであつた。

ドイツ語の俳句とは俳句の五・七・五に做つたリズムの三行詩と言えはわかりになるであろうか。この三行詩を日本語に訳して下さい。今回の訳は公使でもあられる館長の荒木氏、俳句も連句も研究の深い氏の訳である。ドイツ国内での俳句は夫々の都市を中心にして活動しているが、横の繋りの方も荒木氏がとっておられると拝見した。

ドイツ現代HAIKU四分類とは次の様なものである。

1. 伝統指向的なHaiku
2. 非定型の実験的なHaiku
3. 内容が非伝統的なHaiku
4. 感情を強調する、あるいは瞑想的なHaiku

少し説明を加えてみると、「伝統指向的なHaiku」は、芭蕉が確立した蕉風新風を、その弟子達が三百年を通じて維持して来た伝統に準拠したHaikuで、三行十七音節という形を厳格に守り季語を尊重する自然詩、蕉風が良く研究されていた。季語についてひと言註釈を加えておくと、南はアルプスから北のシュレスビヒ・ホルシュタイン地方までと広い範囲であるために、気候も動植物も可成りの差があり、又ここ数年来の気候不順の為に春夏秋冬の季語として取り上げても、生活とは合わない場合があるので、季節概念を示す言葉、例えば「五月の牧場の霧」のように扱って、柔軟な季感表現を取っていることがわかる。私たちが言う二章体は二極間の緊張として表現し、切字の

扱いについては思想の方向転換「息止め、せき止め」と呼んでいる。写真のコピーのようなものではなく、緊張と意外な発見を中に含んだ流れるような短詩をめざしたいという考えは、俳句の原点をよく研究している。「非定型の実験的なHaiku」は、音節が五・七・五に拘らず自由なものである。「内容が非伝統的なHaiku」は環境問題、ドイツ統一のプロセス、都市問題、政治、世界的事件、天災などの感情移入のものである。すべての三行詩をHaikuと呼んで良いのか、川柳の分野とも思うべきものの撞頭を如何するか、洋の東西を問わず問題は多い。「感情を強調する、あるいは瞑想的なHaiku」は著しく異っている。何等かの信仰や思想、處生訓として意図的に読者に強要するもので、詩の自由な考えを閉ざす。

この会場で私の隣に坐られたご婦人があつた。流暢な日本語を使われるので、「随分日本語がお上手ですね」と話しかけると、つくば大学教授加藤慶二先生の恩師、ボン大学教授であられたツァファルト先生の令夫人で、慶二先生の著書『ドイツハイク小史』を手にしておられた。ツァファルト教授は十二年前に亡くなられたが、慶二先生にお目にかかれるかと思ひ出席したと仰有つた。八十五歳ですと言われる令夫人が、ご夫君がお好きであつた「おらがそば」の句を失念したのでと質問をされておられた。名刺の裏に「しなでは月とほとけとおらがそば」と書いて差し上げた。ドイツと言う国が急に身近に感じられた。

桜桃子氏は「私はナルセです。よくナセルと間違つて呼

「無」について世阿弥の能や利休の茶道に触れつつ、俳の精神を述べられ、俳句では欠かすことのできない季語について説明された。続いて関森勝夫氏が、芭蕉・蕪村・一茶の生涯と夫々の詩精神を話されたのである。

会が果てて懇親会場に移動すべく外に出ると突然の雹の洗礼を受けた。ツァファルト夫人がその中を、私達のバスが見えなくなるまで手を振っておられた。

夕かけてケルンの雹や草にとび

清子

マロニエが咲くマロニエの花の中

噴水のほぐれしままに夕かな

同

四都市の俳句交歓会の中で最も胸に響いたのは、旧東ベルリンの俳人との会であった。第二次世界大戦後は政治的分断を象徴する都市として、余りにも有名になったベルリンだが、一九八九年十一月九日の夕方から夜にかけて、二十八年振りに東西を仕切っていた壁に穴が開いた。都市を二分していた壁の崩壊以来旧東ベルリン地区の俳人達との交流を持つことが出来たのは、今回の訪独団が最初ではなかったろうか。すっかり観光の目玉となった壁を越えて東地区へ入ると、緑美しい並木や森ながらやはり東区と西区の落差が目につく。テレビの放映で何回も眺めたブランデンブルグ門は、今はベルリン統一の象徴となり、広場に立つとヒトラー自裁と言われる壕を見渡すことが出来た。

赤煉瓦潰え蓬々とひでり草

清子

菩提樹並木抜けし日傘を開きけり

同

菩提樹は花盛りであった。交歓会は大抵夕刻から始まるので、日中は森鷗外の下宿跡や旧日本大使館で現在の日独センター等のご案内を受けた後、ベルリン俳句会館発足パーティーに出席した。バスが五階建の建物前に着くと、ベルリン俳句協会会長ビエル氏が入口の袖垣に、「ベルリン俳句協会会館」の看板を桜桃子と共に結えた。小道には風露草、うつき、ヒマラヤゆきのしたなどが咲いていた。今日のこの時から此処がベルリンの俳句の中心となつて活発な活動が開始されるであろう。協会会館はこの五階の二部屋で、訪独団とベルリンの俳人達で一杯の中を、皿に盛りられたトマト、セロリ、マッシュルームなどの生鮮野菜を掴みつつ、ビールを酌み合い夜の更けるまでの歓談が続いてきたが、会員の方々が持ち寄って下さったとのビエル氏のご挨拶、このようにして日本の風雅を理解して下さろうとしていると思うと胸が熱くなった。第二回目の交歓会はまことに感動的に終わったが、私にとっては青天の霹靂があった。折鶴を飾ろうと床に坐り込んでいる頭上に飾絵が落下一撃したのである。散乱した硝子の破片の中に一瞬目の前が真っ暗になったが、怪我と言われる程のことも無く、切り抜けることが出来たのは、訪独団にとって何よりの幸いであったと喜ぶ外は無い。欧州は飲料用の真水には不便な国と言われた。ツァファルト夫人がドイツの水道は大丈夫と言われたが用心するに越したことは無い。水を頼むと炭酸入りが主であるから、アルコール類一切駄目人間には

辛い日々、渇きに悩まされてビールも一口二口飲むようになる、ようやく旅も終盤に近づく。慌しく観光と交歓と錯綜する中を、飛行機・バス・列車と乗り継いで移動し続ける。ドイツは実に清潔な整った国であったが、三回目に訪れたミュンヘンは特に美しく陽気な楽しい町であった。

世界最大のビール祭オクトーバーフェストの町で、新市庁舎の鐘楼には、ヨーロッパ最大の仕掛け時計の人形達が踊る。世界一と言われるビアホールで音楽ショーを見つつ夕食となったが、とめどなくダンスを続ける人々の軽やかなステップを羨しく眺めているばかりであった。

ミュンヘンの俳句交歓会は実に明るく温かく楽しいものであった。夫々のテールブルスピーチもさすがに俳人詩人の集まり、ウィットに富んでいて会を盛り上げた。中でもオランダから参加の弁護士「私は美人でも俳人でもない」から始まった挨拶は傑作、それも日本語の挨拶であった。

三光鳥行脚の眠り浅くあり
清子
故国恋ふ青芝置栗鼠走り
同
同

ようやくに最終の会場フランクフルトへと辿り着いた。日本の七草粥に因んで工夫されたと言う七草のソースを添えた肉料理を用意して下さっていた。俳句とは何と優雅なものであろうか。そうした中渡辺勝氏のドイツ語のスピーチ「ドイツ文学と俳句」は拍手鳴りやまずであった。

清子
異教徒にうっぱかづらの筒の花
荒木忠男氏から連句を誘われ、会場をアラベラグラランド

ホテルに移し半歌仙の首尾となったのはよい記念となった。扱少しは観光地についても書かねばならぬだろう。十日間のうち随分と名所旧跡を経巡ることができた。多くの宮殿を見、名庭園を巡った。六百年かけて作り続け今も猶完成途中であるケルンの大聖堂、彫刻、絵画、ステンドグラス、etc、これ等の負っている歴史を思い単に被写体とするのみでなく、歳月の如何に悠久なものであるかに感動し、時空を超えて昔の続きに今があることに畏怖した。旅は自然と人間との対比の中に、自然の恒存性に較べて人間の無常性を感じさせる。ゲーテの命終の語は「もっと光を」であったとされる。されば私が世を去る時には、「もっと連句を」などと最大に気障きせうな言葉を吐こうか。

異邦人に卵の花腐しも無かりけり
清子
このところ帰国怠けの冷豆腐
同

連句入門 東 明雅著 中公新書

連句辞典 東 明雅
杉内徒司編 東京堂出版

新炭俵 東 明雅著 角川書店
大畑健治

平成四年七月十五日
於 深川芭蕉記念館

若 竹 や

東 明 雅 捌

若竹やけふは開扉の芭蕉堂

心字の池に落とす滝音

冷奴藍の小鉢に運ばれて

アニメ番組釘付けの子ら

高窓を月の兔の走りゆき

たどり着きたるやや寒の駅

利酒の過ぎたる酔のほろほろと

嫁取り話聞き耳をたて

お相手は東大出だよ淳子さん

マイルドセブン買ふのやめよう

菟蓐玉干され秩父の七草寺

義理と人情数へ日の月

亡き母がおいでおいでと夢の中

もったいなくておこげ頂く

バルセロナ働き蜂も進出し

百年たつて出来ぬ教会

あっけなく花を散らせる通り雨

乞食の身の貰ふ春風邪

八代

明雅 利子 清子 淑子 良子 光子

清子 利子 光子 代子 利子 良子 同子 清子

焼いて食ふちりめんじゃこは子を抱き

老舗料亭備前大壺

厄よけの猿が鬼門の築地塀

道きくたびに道のびてゆく

短夜の孔子孟子を読み継ぎて

上履さがし叩くごきぶり

ぬけぬけと「ドン・デイスタープ」出したまま

キッスマークをかくすソバージュ

人食って生きし半生令夫人

鳴かず飛ばすの庭の鷺草

薬屋根のずしんと重き亥中月

敬老の日に祝辞とちつて

つれ立ちて女峰男峰の九十九折

駐在さんは鯨髭なり

偏差値で決まる生涯佗しめる

入学祝ひの時計狂ひぬ

試運転新幹線は花瀾漫
百千鳥聞きいこふ夕暮

清光 利子 光子 清子 代子 良子 光子 同子 清子 利子 同子 清子 利子 光子 雅子 良子

朝 顔 市

上 月 淳 子 捌

朝顔市霏ながらに買いひにけり

夏燕とぶ路地の遠近

声高にプール帰りの児等のゐて

パソコンゲームキーの取り合ひ

やはらかく瑠璃色して窓の月

釜の栗飯ほっかりと炊け

そぞろ寒高原列車の人となり

眉濃き君に逢へる嬉しさ

手が触れただけで早鐘うつハート

ブローニングを婦警携帯

国宝の仏像展に皇太后

校倉の庭匂ふ蠟梅

月光に颯の水尾のくつきりと

体内時計酒を欲しがる

両切の哀しんせい愛用し

三代同居表札の文字

花吹雪埋めし河口に友と佇ち

汐干狩にと連ねゆくバス

淳子

淑子

遊

敬

千町

治子

敬

治

淑

遊

町

敬

遊

町

遊

淑

治

淑

ヨードルの帽子に雉の羽をつけ

訛の強き英語話しぬ

兜町相場の鬼と異名とり

増えるばかりの常服健菜

可愛さと煩しさの孫の来て

産土神の鈴緒新し

情念の炎のごとく夕焼けぬ

眠り安けくなれし手枕

しがみつきからみつきてはまとひつき

石けりしてる駄菓子屋の前

消ゆもよし火葬場照らす月青し

粧ふ山を結ぶ稜線

ロシアンティジャムをとかして冬隣

単身赴任時間たつぷり

新聞のまとめて届く七日分

頭上せはしく蛇のとびかふ

ナビゲータ地図に花びらまひ込みて

旗をなびかせ鯛網の船

町

遊

敬

町

淑

遊

町

治

遊

淑

敬

治

町

治

淑

敬

淳

治

令法の花

杉内徒司捌

深川や令法の花の芳しき

夏のほかなる小さき水音

金玉糖玻璃の器に盛りわけて

テスト満点満面の笑み

月おぼる用事ありげに友の来る

猫瘦せて待つ春寒の家

流水に埋めつくされし北の海

サツに追はれて国境を越ゆ

円らな瞳うまきテキーラすすめられ

思ひ思はれ結ばれぬ恋

梨園には梨園の決り習ひあり

さっと入院組の小頭

新月に打込まれたるホームラン

おくんち囃子賑やかな宵

こほろぎも暫し鳴き止む駅の裏

ロケ隊の来るダムになる里

銀紙の刀見得切る花吹雪

はるか彼方に初虹の立つ

徒司

郁子

澄子

みづゑ

香

雪

澄

ゑ

郁

雪

香

司

ゑ

郁

澄

香

澄

郁

鈴ナカの雛ふって余生を楽しめる

勅願尼寺の灯をとます尼

京都御所内に鬼の間ありといふ

ワトソン君と探す馬車道

姉と張り合って射止めしうちのひとつ

いつもねんねと軽くいなされ

熱燗で離婚届に判を捺す

狐がそっと覗く北窓

冷蔵庫の豆腐氷りて凍み豆腐

エコロジー説きゴミの高出す

思ひ出の湯の町エレジー歌ふ月

棹オノさし渡る雁の群

秋場所も乱戦模様見逃せず

書いては消しぬ夢といふ文字

旅人算小股内股追ひつけず

牛にポケベル持たす牧場

濠めぐる枝を潜りぬ花の雲

右に左に蝶を追ひゆく

ゑ

香

郁

澄

香

ゑ

雪

郁

司

ゑ

郁

香

澄

ゑ

澄

司

雪

香

梅 雨 明

高 瀬 美 保 捌

梅雨明や河口に近き橋渡る

麻の暖簾はめざすどぜう屋

七宝の優勝の楯飾られて

割込み電話ひっきりもなし

見回りの守衛の仰ぐビルの月

宅急便で林檎受け取り

鴉ウの声しやう正せい法ぽう眼がん蔵ざう講かう義ぎ終しゆうへ

伽羅の香残し過ぎし衣擦

エスパニア万博へ皇子発ち給ふ

足にまつはるチワワ、スピッツ

張り紙に「勧誘禁ず」住宅地

騒音をまき選挙はじまる

極月の金借りまはる月あかり

おでんの屋台呷る爛酒

病院の待合室のサザエさん

近々と見し母さんの髭

野外能高砂の尉花の下
麗らかなりや佐渡の内海

春ナ深し何忘れむと出でし旅

正午の時報時計合はせる

給食のオムレツとピザみんな好き

甘ったれるな崩すアリバイ

先端に白きがゆらぎ半夏生

髪洗ひをり立膝をして

けふこそは思ひの丈をたつぷりと

デイスコ、カラオケふたり熱々

高速路テールランプが小さくなり

女神の像に月光が降る

定年のわれは糞虫けんちゆう放屁はんぺい虫

水みづ桶の馬面剥が向き向きに

古きミンンを踏める仕立屋

行商の荷にかくれ行く田舎道

かぎろひ燃ゆる高原の椅子

花吹雪無音の葉を聴くごとし

吟行会の寺の鷺苔

道	志	孝	道	弘	孝	道	秀	弘	同	孝	志	弘	道	子	道	子	志	隆	秀	孝	子	美	保
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

向 日 葵

豊 田 好 敏 捌

向日葵や大川端に風渡る

暑中見舞のハガキみづ色

生鯛をあらひに造りもてなさん

とろりとろりと居眠りの嬰

ものの鬩きはやかにあり初の月

土蔵の壁にとまる溢れ蚊

今年酒口に含めば香の立ちて

ハーフの娘よりクォーターがよし

ハチキンの妻に負けじとボディール

通勤電車いつも満員

麻雀屋空卓ありの札かかげ

金の感覚違ふ一桁

「都鳥」さらふ三味線月を受け

前垂掛けで足袋は別珍

父祖よりの民具並べてジャパンデー

キャノン・ニコンにミノルタの列

花びらの肩にかかりし僧の行く

春泥の靴拭ふ子供等

好 篤 富 杉 正 一
敏 子 美 亭 江 同 惠

中天に連なる仄の舞ひ上がり

古伊万里に盛る豚のバラ肉

拳銃のまぐれ当たりにうるたへて

ちちんぷいぷい知らんぷり婆

フラダンス灸の痕もなんのその

荷風散人食傷の夏

岡場所にいる悪ぶって居続けす

みんなあつまれさしもせずん

あるものは在るままに拭き秋深し

月の高みに鳥の影ゆく

霧巻きて北満戦線いま遥か

沈黙のまま終はる生涯

おしら様重ね着をまた重ねやり

一病多災無病息災

「やってよ」と薄荷煙草をすすめられ

クラスメートの声のどらか

盆栽の花の幹には苔むして

弥生狂言決まる配役

亭 江 同 惠 江 惠 篤 富 篤 富 同 篤 亭 敏 富

墓

佛淵健悟捌

堂守のごとしや庵の臺

河骨の浮く奥山の池

高原にキャンプの子らの集ふらん

カレーぐつぐつ煮込む大鍋

月の下美術全集取り出して

糸瓜の水のはやるこの頃

誘ひ合ひ穴織祭に姉妹

独り身の鬱かこつマドロス

タベルナで聴く恋の唄海碧し

牧場で草を食んでゐる牛

この村は挙げて共産鬮なり

朝から叔父は般若波羅蜜多

鯛焼を買ひに出づれば月ありて

初ボーナスはほんのお涙

町子さん国民栄誉賞を受け

雀ちゅんちゅん蝶はひらひら

タンDEM車風切って行く花の土堤

丸かじりする甘きオレンジ

健悟

啓世

雅代

久美子

達子

路子

久路

世路

世路

代達

世路

世路

代路

代路

久代

久代

春惜しむ地下の茶房の吊人形

廊下にちらとあやしげな影

ヤク打たれカラシニコフを射ちまくる

エルニーニョさん早くお帰り

もてなしは縞鯨をこぜ唐揚げで

息づける胸敵ふうすもの

有耶無耶の世界へ落ちる乱れ髪

返しそびれしポケットの鍵

駐輪場畑つぶしてもう一つ

癌次々と友を奪へり

行く雲の行方見定む月の縁

青松虫の声のうるさく

キャンパスにポスターいっぱい文化祭

レミーマルタンお湯割りにする

いつも留守宅配便は持戻り

夢種々の絵風大風

花吹雪ハワイの力士にっこりと

都電で巡る町ののどかさ

達

同

同

世

同

代

路

久

達

路

久

代

久

達

世

達

世

悟

射干や

若尾 よしえ 捌

射干や紀子妃殿下の御印

喜雨にうるほふ庭の白砂

高機^{タカノ}の山繭糸を掛け終へて

洗ひざらしのジープンの膝

ホームまでエレキの響く月明かり

南瓜まんじゅう家包にする

秋場所の最負力士の品さだめ

脇が甘くて恋寄り切らる

学園の女王弾みつきしまま

自動小銃かかへサラエボ

島々をめぐるクルーズ青き風

冬の苺を晚餐の月

形見分け決めて蟻螂粘るる蔵

猫はかつぶしパックつけやる

茫々と手入れの悪きゴルフ場

覗き穴からのぞくちび達

吟醸の銘酒囲みて花の宴

訛りのどかにつづくスピーチ

よしえ

冬乃

和子

瑞枝

政志

麻子

和枝

志枝

乃志

乃麻

和乃

乃和

和乃

乃和

和乃

乃和

志枝

麻枝

^ま往年の名士人氣の春過ぎて

せかせか歩き下駄の前減る

会ふ度に方丈様の腹太り

マイクロバスで園児送迎

おほるりもこるりも見たと絵日記に

年をとらないさざえさんです

湯加減もおおずと問ふ婿の癖

夢でも言ふまい外でした事

ワンレンのミニが娘と云ってくる

バブルはじけておこる鬱病

月赤くみんな地球にやさしくね

吊橋はさむ峡の黄葉

^ま重陽は句作の旅に連れ立ちて

入歯につまる鮎の甘露煮

給食を止めると町長宣言し

留守番電話満杯となる

お抜ひの風に頂く花の片

外庇ごし仰ぐ初虹

志和

和麻

乃枝

乃麻

和志

志乃

乃枝

同枝

和乃

乃和

志乃

乃和

志乃

乃和

志乃

乃和

志乃

乃和

付句募集 (付勝練習二十韻)

切日 締日 句日 投日
10月20日

十九号から連載した付勝練習二十韻が三十七号まででた
く満尾した。昭和六十二年十二月から平成四年六月まで、
足かけ六年にわたる長丁場であった。

糞虫の音を聞に来よ艸の庵

初めて涼し掛けし濡縁

海岸線波頭真白に月ありて

飛ぶやうに行くホバークラフト

心太芥子きかせてすすり込み

制服脱いだ彼とくつろぐ

さりげなくお守りだよと犬はりこ

回教国は酒も御法度

バザールに水煙草吸ふ男たち

すこし疲れて美術館出る

見上ぐれば麻耶のあたりに雪しまく

客待つ暖炉あかあかと燃え

据ゑ膳は食はぬと言った嘘もばれ

電算三課セクハラの罨

ゴミ袋つつく不気味な烏たち

芭蕉 正雄 千遊 淳子 よしえ 元子 和久 良子 正雄 鋭太郎 達子 志げ子 妙子 藍子

ちよいとそままですててこの月
やあいようはてな名前が出て来ない
仔猫を抱いて満面の笑み
花びらを糸に連ねて首飾り
軒にちらちら燃ゆるかげろふ
あかり 達子 智子 秀子 美和

六年もかかって首尾した作品であるだけに私には特に思
い出の深い一巻であり、最後まで熱心に投句して協力して
下さった多数の方々に深い感謝の意を表する次第である。
さて、次号からは、次の発句で、二十韻を巻き進めたい
と思う。

ふるさとや馬追鳴ける風の中 秋桜子

馬追はすいと・すいっちょ。初秋の季語である。気を新
たにして、多くの方の応募を期待する次第である。

* * * * *
「季刊連句」に左の方々より、御芳志をいただきました。
有難くお礼申し上げます。

一金 壹万円 鈴木 春山洞 様
一金 五万円 猫 蓑 会 様

芦丈翁俳諧聞書(V)

(承前) Nそれでね、喧嘩ちゃ、こういう事も何だだ。甲府に松本守拙という人があって、その人にオラ大変世話になったけどね、その人と出雲の松江にね、好一という人があって、三吟でやった事があったがね。わしの句を好一の方へやって、こう廻るのでね、ところが、わしの句がね、「机によれば冷る膝皿」と、膝小僧が冷たいという句を取って、それへ好一が、「一蝶は配所の月をよそ顔に」、というのを守拙がきめておらの方によこしたもんで、これはいけねえと、冷る膝皿という目の句でね、絶対動かない目の句へもって行ってね、他の句をこういう付方はよくねえと言って、わしが守拙の所へ言ってやっただね、もし他の句を付けるならば、「一蝶が唐紙さつと開けて来て」というように、他を向いあわせにやいけねえと、こう言ってやった所が、守拙がね、古人を眼前に活躍させるちゅう法を、おめえは知らねえかこう言ってくる、それは知っていると、知ってるけどこういう、それでその机によっている人を一蝶と見立てたのだと言うもんだで、見た

てたちったって、自と動かねえのを他に見立てるのはいけないと、そいってやった所が、しまいには敷たたいるだ、おれは出雲の曲川にも、三河の逢宇にも頭たたかれた俺だからして、俺の言う事はまちがってねえで、それで読書百遍で、幾度でも読んでみると、間違っちゃいねえと、こう言ってるだ、そういうことをいいたことがあるけどね、Hその巻は完成したんですか。Nそれは満尾しただ。満尾したけど、わしの手前の手控えの方を直しているだ。向うの帳面には、それから好一だってね、守拙に言わせりゃ、ま、西国の方じゃ、好一が一番だと言うけどね、わしの句にね、「青竹に祭の鬼の叩かれて」という句をやって、それを取って、それからして、見ている男の泣き笑ひする、と付けてあるだ。そんな付けじゃねえ、どうしようもねえだ。そんなみじめなものね。叩かれたのを見て気の毒に思ったか、泣き笑ひすると、ちつとうがって言えば、その泣き笑ひする男の親爺さまか何か鬼の役に頼まれて、出たものを、祭だもんだで叩いたって、何の叩きのめすちうほどじゃなくても形をするだけだんねけど、そういう時には、うまく受けなくち

や駄目だわね。こりゃ大上段にふりかぶったのを、ばちんと受けといて、すぐその返す竹刀でお胴のすいた所へ斬りこむというように行かには、面白くねえやつを、泣き笑いする。なんだかそんなの連句でも何でもねえ、前句を生かすちうことを知らねえだ。そこに行きゃ、あの武州の秋香などはね、「十も二十も子を引いたいた」と、颯の事をいたともいう、それがね、颯がね、とても仔を産むやつでね、それがちよろちよるとまあ、いくつかとんであるく、そこでね、「勝手さへなき古家の雨の漏」という句をマアわし付けただ。古い家のねくさったような庭のあたりに颯がとび廻っている場所を付けて、そうしたら、秋香老、秋香老のそういう所がおもしろい人で、「むんずとつかむ幽霊の裾」と、それから幽霊の裾と、本当の幽霊に裾のある苦もねえし、幽霊だけど、そんなものあるかないか分からんけんど、そいつわしやうけてね、「胸の火の炎の先やおそるべし」、というね、そういうものにせの幽霊とけいってね、息子が死んでね、嫁様を追い出しといて、弟にあとらせたい、別の所から嫁様を貰いたいといううなのでね、鯉節を幽霊の角

にしてやったという、まね、そんな咄もあるですわ、まあ、そういう所と見て、「胸の火の炎の先やおそろるべし」、そうすると秋香老はね、「蚊の針あとのはれし拾ひ子」とね、捨子がね、蚊にくわれて、むごいことよ、ま、こんなにぶくぶくと蚊にくわれていると言って抱き上げる、そういう運びの所でね、それに続いて又いつまでもやっていたじゃ仕様がなくて、それでまあ、その捨子という所で、キリストが生まれた時男の子が生まれていかにもいい子で、けど戦にまけて男の子はまあ皆殺してしまえと、それからして、その死海という海だか、湖へしずめるように籠に入れて、もって行っただけど、いかにもそのいい子で海に沈めるに忍びんで、草の中に置いて来たよ、そんなような事をね思い出して、月の出て、そこは月の座になるだ、「月の出て青葦原の一そよぎ」、とそしたら秋香老はそれにね、「俵の空きにかこふ雪隠」という、そういうまあ付けをした、青葦原の湖水の傍のような所にね、あいた俵でかこつた雪隠をね出した。それからわしがそれに付けたのが、よく弓をひく連中が矢場の近所へ俵俵をかけた小便小屋のようなものを作るわ

ね、そういう所と見て、「へら弓にすぎたうつぽもかほめたし」と、四分位な弓で、それからお父さんの用いたうつぽだか、どっかの鞆で買って来たか、猿皮の鞆か何ぞをね、不似合なのを持ってね、おめえにやすぎたなんてかまわれる。「へら弓にすぎたうつぽもかほめたし」それから何だったか、そういう運びで、秋香老は西国を長門まで行って、行脚たつてあの衆のは何も行脚というじゃねえ、まあ漫遊のような、聞いた俳人の所を長門まで行って、それから帰って来て、帰りに信州に入り、それからわしん所へ来て、そこで善光寺へお参りしでうちへ帰った。その時に又、秋香老はね、うそと自慢はきくはいやだが、ほらふきやおもしろいと、自分もほらふくだ、芦丈が所へよって、この巻は二時間で巻いた巻だと、二時間じゃねえだ、四時間位はかかったけどね、それから、その時に廻って来たうちで、一番たっしやなのは芦丈だな、どうも他石(贅川他石)の方がまをとって、てまを取って、どうもため小便、小便こらえてるようで、どうも気が悪いとこんな話をしてね。

その他石さんが一度「蕉風」という雑誌

に、こういうことを言い出して、何でも彼でも五句去りにしておきや一番世話がないと言った。それでわしやすぐ反対したが、その理由は、植物なんでものは季節に上げただけだつて何千とある。それを五句去りにすると、花が二本あるで、それでどうやって行くと、植物で五句去って植物で、その次に五句去って植物になると、花との間が近くなる。すると、立句が植物で、その次に植物一つ出して、それから花、又、うらに行つてもそういう形になる、それで誠にその沢山ある植物をせばめられてしまう。植物、生類でも何でも、そういうあんばいでますいと、それだ、何でも彼でも三句去りにしておいて、それから五句去りというものは、いつか話した「衣季や竹田の船路夢泪、月松枕五句隔べし」こういうものは、五句去らにやいけないという、それでパランとしたものをしておく方がよいと、そんな事を言つてね、他石に言つてつぶしてしまつたがね。H俳諧の式目は大切ですね。昔の俳諧を皆よく研究しなければなりません。Nエエ、昔の俳諧、いい俳諧というようなものね元禄以前の芭蕉のものでは「冬の日、蕪村の」も「もすも」歌仙、これらはすばらしいものです。

「猫蓑作品集Ⅱ」を読んで

梅田利子

「猫蓑作品集Ⅰ」に続いて「作品集Ⅱ」の校正の手伝いを微力乍らさせて頂き、「ついだから感想も書きなさい」とおっしゃる先生のお言葉を「勉強しなさい」という叱咤の言葉と見立て替えし、今までになくじっくりと作品を読ませて頂き、猫蓑会の連衆の方々の力量を痛感させられ乍ら、沢山のよい付合いの中から印象に残ったいくつかを鑑賞して見たいと思う。

「蜻蛉」の巻

4 鳥獣虫魚揺れる方舟

孝子

5 ピアスして殿方同志棲むも憂き
現代の方舟ならぬマンションから雑民党の殿方の憂いが
聞えて来る。

「終戦日」の巻

7 月涼しホルン唳々響きつつ

淳子

8 海の泡より美神生まるる
ホルンの響きに誘はれるファンタステックな付

「台風」の巻

リズテラー八度目の婚記事となり

京子
康子

華やかなゴシップの裏の恋の痛みを切って見せたまはりの付

「葱坊主」の巻

3 父親のない子を生んでなぜ悪い

桐雨

4 瘦せたキリスト疎らなる髭

明雅

前句は現代の若者の倫理観、それに対して苦悩するキリストの姿の対比、考えように依ってはキリストも父のない子かも知れない。ウ3の様な俗談的な表現がこの頃多くなって来ている様に思うが、4の付は前句を生かすあざやかな手法を示して下さった様に思う。

「帰り花」の巻

5 警察官教員議員の旅行会

秀樹

6 高圧線の続くどこまで

好敏

5は公僕達の旅行、6の付は一見野山の光景と取れるその場付であるが、何万ボルトの高圧線を想像して一種シニカルな響きと受け取るのは深読みだろうか？

「震災忌」の巻

9 伊邪那美を追ふて伊邪那岐坂を越ゆ

千町

10 尻もちついたここが絶景

水壺

9は神代の神様の恋のおっかけごっこ、さすが神様は大きな、神話のマンガを見ている様な水壺氏の付には、可笑しいやら、感心するやらで、連句の楽しさを味わせてくれる。次に三句の渡りを上げて見たいと思う。

「ころもてふ」の巻

- 1 黒楽の翳のふかみに迷ひこみ 祥子
 - 2 利休の妻の恋のせつなき 道子
 - 3 とがらせた唇誰のものならん 藍
- 黒楽の翳から利休の妻へ転じる巧みさ。利休の妻はどんな人だったのだろう。オ3は前句のせつなきをユーモラスな付に転じて面白い。

「文化の日」の巻

- 8 彼女からよと電話取り次ぐ 和久
 - 9 お皿が宙をとんだりいたします 同
 - 10 見世物小屋の侏儒はつらつ 正江
- 彼女からの電話でお定まりの夫婦喧嘩となったのであろう。9のなんとお上品なおっしゃり様。そして皿を飛ばしているのは、見世物小屋の芸人であったとは。この見立て替えの意外性も又連句の醍醐味の一つである。9は8の位付でもあると思ふ。

「行く秋」の巻

- 3 今はまだ離れられない筒井筒 泰子
 - 4 枯葉剤にて生れし奇形児 蓉子
 - 5 水くらげ食物通る腸も見え 泰子
- 幼なじみの恋の恋離れに枯葉剤という現代の戦争の悲しさが入りまくっている。5は奇形が生れるミクロの世界を水くらげの腸に転じて見せてくれる。芭蕉の時代には見ら

れない現代の付句。

「夏越の抜」の巻

- 4 やとはれマダムせまる鼻声 和子
 - 5 月蒼く逢魔が刻はくちなはに 貞子
 - 6 おいてけ堀は本所深川 和子
- 逢魔が刻、くちなはに、おいてけ堀、本所深川の四つの言葉が移り合い響き合う付

「梅林」の巻

- 3 翁の生家芭蕉玉巻く 光子
 - 4 妻ならず妻のやうなる人と棲み 千雪
 - 5 ねんごろに刺る長き衿足 路子
- 芭蕉には、親しく親子の面倒を見ていた人がいたと読んだことがあるが、その俳付であろうか。5はしつとりと美しい恋の付句

最後に第三について考えて見たい。発句にも増して第三の作句は難しい。丈高く大きく転じていて留めが決っていてその上内外の関係も考えねばならない。沢山の制約を背負って一卷に影響を及ぼしているのが第三である。もう少し自由にしてやれないものだろうか。例えば内外の関係、作品集中発句外は五十八篇、その中で第三の外は三篇だけだったが、内外をもう少し自由にしたら、第三の句が広がる様な気がするが如何でしょうか。この稿を書くに当たって連句の面白さ難しさをより一層勉強させていただいた。

宗匠制度 礼讃

大畑健治

正江さん、平朗さん、和子さん、立机おめでとございます。

実作界からずっと遠ざかっていた私も、平塚に室内合奏団を作ろうということで、設立準備以来、事務局長の雑用に追われていました。しかし、いろいろお世話になりました。正江さんが立机なさるのに、お祝いもしないでいるわけにはいきません。そこで、正江さんにお世話になった大学や高校の先生がたに相談し、付廻し俳諧を試みることにしました。四月下旬に巻きあがり、五月に木谷和子さん（囲碁界故木谷実九段の長女）に揮毫をお願いし、額に仕立てました。六月六日、これを鶴巻町に設けた席で正江さんにお手渡しできて、ホッとしております。

昭和の連句復興が始まって間もなく、宗匠制度は封建的な遺制である、との批判が出ました。確かに封建社会の中で育まれた制度ですが、宗匠自体は封建的な存在ではありません。宗匠こそ、封建社会の中にあ

って、精神的ユートピアの保証人たりえた存在です。身分・年令・男女による差別が社会の体制を支えていた時代において、俳諧の宗匠は、それらの差別なく、連衆を平等に扱う存在でした。徳川幕府がこうした反体制的な制度を黙認していたほうが不思議なくらいなのです。

連句の宗匠は、親から子へと世襲される絶対的な権威を持つ宗家ではありません。一人の師匠から大勢の宗匠が擁立され、宗匠を許された者は、師匠の悪い教えを取り除き、自分なりの工夫を加えて指導します。現在、俳誌の主筆者が引退や他界をしたとき、編集者がその後任に当たるのが常識となっています。これは、宗匠の後を執筆が受け継ぐ形です。

問題は、だれもが自由に俳誌の主筆者になれるということでしょう。これは、俳句が知識と感性と技術を身につけた人の作品を優先しているからです。こうした作品至上主義の傾向は、現代文学全般に及んでい

ます。しかし、連句は芸術とは違った芸道です。知識・感性・技術のほかに人間性が大きな比重を占めています。

現在、現代文化は世紀末を迎えて見直しを迫られています。それは、自我の確立と封建制の抹殺を名目として切り捨ててきた伝統的な文化の中に、人間性にかかわる重要なものがあつたのではないかと、という反省に立つてのことです。それなのに、宗匠制度はそうした近代的精神の盲目的崇拜者により、切り捨てられようとしています。

人間性を奪ってきた教育制度が、いま大学にどのようなツケをもたらしているのでしょうか。若者が歌うロックバンドの歌詞は、救いを求める魂の叫びでしかありません。彼らはおもしろおかしく、楽しい世界に生まれ育ってきました。そうした彼らがどうして救いを求めているのでしょうか。

若者が求める厳しく自由な世界を、宗匠制度は秘めています。この宗匠制度こそ近代的な優れた遺産なのです。

◆二十韻六卷

風薫る

秋元正江

他

梅鉢の紋

倉本路子

他

紅梅や

文音

中島啓世
東明雅

風薫るおころもがへの宮居にて

たまはる梅酒まるやかな味

遅しきハスキー犬を飼ふならん

かろき口笛路地の奥より

有明に旅立用意整ひぬ

ウインクをする娘爽やか

説教も聞き飽きました秋深し

大聖堂の木椅子かたかり

この頃の世界状勢不安定

綱に届かぬ小錦の腕

テリトリ一数百料か尾白鷺

雪の庵に山姥の我

子供好き子とろ子とろで切りもなく

指にふれても耻かしき頃

うつむきし項香水匂ふ月

下地っ妓にも慣れし雑巾

ふるさとの海山夢み病める祖父

うから揃ひて若布干すなり

くしやみして花吹きちらす天狗様

蝶蜂虻もうかれ舞ふ屋

平成四年五月二十五日

於 錦糸町ビル茶房

梅鉢の紋涼しげや欄直一人

五月尽なり奉納の盃

名物の甘辛団子幼らに

鯉のびちゃりとはね返る音

消防車十六夜の下帰り来る

ガーター編みで彼のマフラー

年下の時に愛しく憎らしく

土佐闘犬を曳いて行くひと

スポーツ紙見出し競ひて駅頭に

物議をかます人種問題

世阿弥忌の香炉に線香つぎたして

月眺めつつ連歌序破急

柚子坊ののそり現はるあをあと

健忘症は老年のわざ

間牒の27号しゃがれ声

レモンスカッシュ口移しされ

故郷の山懐しき同窓会

南へ西へしゃぼん玉飛ぶ

樹木医の蘇らせし花万朵

炬塞の席セピアのひと

平成四年五月二十五日

於 錦糸町ビル茶房

紅梅や十とせの想ひ咲きつきぬ

仰ぎ見送る引鶴の影

祝膳鯛の浜焼飾りゐて

笙の音取りの響く次の間

枯河にミニゴルフ場月の下

狐女にまたもだまされ

しのび逢ふぬれそぼちたる浅茅原

何を夢みる半跏思惟像

手にも下駄五体倒地で人進む

秘境に生きる幻の民

泡盛に似たる生酒に酔ひつづれ

かひなさすりて冷房に耐へ

婉然と流し目をして女掏摸

惚れたが因果入れあげる日々

曇らせて見せてやりたい望の月

首洗ひ池破連浮く

辿り来し芭蕉の道も秋深し

携帯電話にいとし子の声

神の花根尾の桜は真盛り

蝶のたはむる瓜坊の編

自 平成四年三月

至 同 六月

啓世

明雅

世

世

世

世

世

世

世

同

世

世

世

世

世

世

世

世

世

世

世

世

筍

文音

式田和子
峯田政志

玉蟲

佛淵健悟

捌

梅雨曇り

豊田好敏

捌

筍や貰ひ合はせし酒「嘉泉」

和子

たたう紙のあひに玉蟲光りけり

和子

魚河岸は江戸の名残や梅雨曇り

明雅

夏暖簾分け集ふ連衆

志

霞戸に替へし奥の小座敷

哲

南東風運ぶ威勢よき声

茂

幾重にも重なる山を借景に

子

びようびようと磯馴れの松の風聴きて

恭子

窓枠に子等の頭の連なりて

秀樹

深呼吸する肺の奥まで

志

マウンテンバイク好む若者

健悟

カメラ向ければポーズとる猫

英子

チャリテイのバンド幕間に月仰ぎ

子

赤い羽根つけた高校二年生

凡

オペラはね浸る余韻に斜め月

碧

桔梗添へしタイを贈られ

志

胸の谷間にちくと後れ蚊

同

葡萄酒醸す山裾の村

好敏

醸さるる葡萄多情の血のごとし

子

月の下飲み過ぎたふりキッスまで

恭

離婚など噂もたちて肌寒し

英

砲煙いまだ絶えぬ中東

志

オバタリアンで選挙戦ふ

哲

五十の坂を越えて恋して

憲司

よく吠える犬は何語で叱らうか

子

はたとせも基地の爆音絶えもせず

和

七曲り辿りつきたる奥の院

樹

添ひ寝で嬰の水漬を拭く

志

お決まりの座に香箱の猫

同

名も知らぬ木に名も知らぬ鳥

茂

大火鉢据ゑてお通夜の準備成り

同

楮蒸す住職いつか齡重ね

哲

闇汁に誰がスリッパ入れたやら

樹

舎弟・客分・若頭席

子

元氣ドリンク子らが欲しがり

恭

噓しはぶき涎水漬

雅

雑魚ばかり二三尾かかる法の網

志

恋人に自作ビデオでアプローチ

同

皆が皆主役で古稀の宴聞けく

樹

逃げた女房と銀行で逢ふ

子

金粉 Show も出世したなあ

和

姿は菩薩内心は夜叉

英

出家して除かぬ煩悩夏の月

志

大阪の宿で稿債夏の月

哲

月涼しエージシューター夢にみる

雅

眉ふさふさと長寿めでたし

子

鴉の鳴かぬ街もあるかも

和

首ったけなる馬鹿なわたくし

茂

瀬戸内の段々畑群雀

志

莊嚴にゴスペルソング流れるて

凡

清姫に鱗が生えて川渡り

雅

真珠筏に薄く淡雪

子

ほうれん草をバタ炒めする

哲

ラム入れて編む春のセーター

司

花三分咲きし便りに笑みこぼれ

志

乳母車押しつつ花の中を行く

悟

盆栽の花の盛りを気遣ひて

敏

文音満尾これぞ春興

子

春うららかな国境の原

凡

遠く近くに麦踏みの人

碧

自 平成四年五月十日 起首

於 平成四年七月一三日

於 平成四年六月十八日

至 同 七月三日 満尾

於 渋谷連句会

於 電通連句会

連句会案内

＊連句教室

日時 第一日曜日 午後一時～五時
会場 江東芭蕉記念館

江東区常盤一―六一三
(電) 三六三一―一四四八

＊柏連句会

日時 第二日曜日 午後一時～五時
会場 光ヶ丘近隣センター

(南柏駅よりバス 光ヶ丘団地
マーケット下車)

＊A・C・C連句・理論と実作

日時 第二・四土曜
午前十時～十二時
会場 新宿住友ビル四十八階

朝日カルチャーセンター
(電) 三三四四―一九四一(代表)

＊猫蓑会(会員制)年四回

(一月・四月・七月・十月 第三水曜日)
会場 江東芭蕉記念館

江東区常盤一―六一三
(電) 三六三一―一四四八

雁帛往来

▽五月三日 深川芭蕉記念館にて連句教室。
▽五月四日 俳句文学館で古館曹人・草間時彦氏と三吟歌仙興行。
▽五月九日 A・C・C。第三と転じについて話す。

▽五月十日 柏連句会出席。
▽五月十二日より二十一日まで、エジプトトルコ旅行。古代文明について学ぶところ多し。

▽五月二十三日 A・C・C、歌仙式について話す。終ってすぐ新小岩にかけつけ鶴の会(俳句会)に出席。
▽五月二十五日 亀戸天神懐紙奉納。終って錦糸町茶房で直会の二十韻。

▽五月二十七日 婦人画報の人々と一座。
▽六月六日 関口で大畑健治氏らと会し、二十韻興行。

▽六月七日 深川芭蕉記念館にて歌仙興行。
▽六月十日 第二回猫蓑同人会。二名の新人を加え出席三十一名。盛会であつた。

▽六月十三日 A・C・C、式目について話す。

▽六月十四日 柏連句会出席。
▽六月十八日 電通連句部出席。

▽六月二十七日 A・C・C、月・花・恋について話し、終ってすぐ鶴の会にかけつける。

▽六月二十八日～三十日 平泉を訪ねる。三百年前のちょうどこの頃、芭蕉もここを訪れている。感ずる所多し。

季刊「連句」第三十八号

平成四年九月一日発行
編集人 東 明 雅
発行人

季刊「連句」発行所

▽277 柏市つくしが丘二ノ二ノ二 東方
電話 〇四七一(七五)二一九二
振替口座 東京七―五二二三三

印刷所 株式会社 岩田印刷

▽277 千葉県柏市酒井根六二六一―一
電話 〇四七一(七四)〇一八三

定価 一部 五〇〇円 送共
一年 二〇〇〇円 送共

連句辞典

東明雅・杉内徒司・大畑健治編

版

B6判

三五二頁

三五〇〇円

連句の実作・鑑賞・研究に
必須の知識をすべて網羅！
初心者から研究者まで使え
る本邦初の連句辞典

本書は、用語篇、人名篇から成る。用語篇は、現在使われている用語を中心に三二四語選び、意味・用法の解説をし、「参考」欄の引用文は中・近世の諸資料から、用語がどのように記されているかを抄録。人名篇は、近代以降に活用した連句人、俳人五十四人を選び、項目末尾に代表的な連句作品を収録した。また、連句入門の手引き、連句概説、連句略史を付した。近代連句の状況を知る上で貴重なものである。

収録項目例

〈用語篇〉 挙句 会釈 一座一句 有心 打越

思いなし 表八句 懐紙 歌仙 軽み 切字

景気 五句目 差合 去 式目 四春八木

〈人名篇〉 天野雨山 伊藤松宇 上田聴秋

鷗沢四丁 小林見外 下平可都三 関為山

高橋玄一郎 高浜虚子 中村俊定 野村牛耳

水原秋桜子編 二三〇〇円
俳句鑑賞辞典

貞徳・宗因から現在活躍中の俳人まで二七〇人の古典的かつ伝統的な名句一〇〇〇句を収め、豊かな実作の経験を生かし句作にも役立つ

水原秋桜子編 二八〇〇円
現代俳句鑑賞辞典

結社や傾向にとられず現代の代表的な俳人五〇五人の代表作一四六八句を収め、公平に客観的に鑑賞した。俳句鑑賞辞典の重複なし

大後美保編 二八〇〇円
季語辞典

日本の季節にまつわる言葉やスモッグ・不快指数などを収録し、春夏秋冬の四季に分類した。気象学者の立場から厳密に季節を分類

中村俊定監修 四五〇〇円
難解季語辞典

古典俳句に使われる季語は今日では意味や表記が難解で正しい解釈や鑑賞ができない。本書はそれらの季語二千語を収め、解説を施す

国語学大辞典 B5 一〇〇〇円

国語慣用句大辞典 白石大二編 A5 八〇〇円

国語慣用句辞典 白石大二編 B6 二〇〇円

国語史辞典 林巨樹他編 B6 三〇〇円

日本語源辞典 堀井令以知編 B6 一八〇〇円

京都語辞典 井之口・堀井編 B6 一八〇〇円

擬音語擬態語辞典 天沼 車編 B6 三〇〇円

隠語辞典 樺垣 実美編 B6 三〇〇円

近世上方語辞典 前田 勇編 A5 二五〇〇円

花柳風俗語辞典 藤島忠夫他編 B6 三〇〇円

大正新語俗語辞典 中山泰昌編 B6 二〇〇円

難訓辞典 荒木良造編 B6 二〇〇円

名乗辞典 森 隆彦編 B6 四〇〇円

名数数詞辞典 奥山益綱編 B6 二〇〇円

あいさつ語辞典 鈴木繁三編 B6 一八〇〇円

新版 ことば遊び辞典 鈴木 広田編 B6 五八〇〇円

類語辞典 徳川・宮島編 B6 一〇〇〇円

類義語辞典 藤原三他編 B6 四〇〇円

表現類語辞典 神島・村松編 B6 二〇〇〇円

東京堂出版

101東京都千代田区神田錦町3-7

電話03-3233-3741~2